

研究会報告

訪問場所：砂層の露天掘りとアマルガム製造工場

訪問日：2019年3月27日午後

高峰 武

熊本学園大学特命教授

村の入口付近。サトウキビ畑や僧院、学校とおぼしき建物が一緒になった場所を見ながら進む。牛の水飲み場、豚、農機具小屋らしきものもある。

施設の入口に警官か警備員か不明だが2人立っていて、ゲートを開ける。特に看板らしきものは見えない。やがて周囲に緑がなくなる。そして砂層が車の両側でむき出しになってくる。さらに進むと、目前に巨大な穴が見えて来た。

とにかくでかい。最初へのぞいた時の印象はクレーターのようだった（写真1）。直径はどのくらいだろうか。説明員に聞いたところ「分からない」との返事だった。関心もなさそうだ。深さは500mだろうか。直径2～3kmはありそうに思えた。



写真1 砂を露天掘りで掘っている。作業する人が小さく見える

大型機械が動いているのは、会社が採掘をやっているところ。働いているのは15人という。その周辺で働いているのは個人の金採掘者。ここには誰でも入れる。村外でもいい。お金もいらぬ。それぞれが自分なりの場所とやり方で思い思いにやっている。

谷底にパイプが引かれている。Ayeyarwady（エヤーワディ）川から水を引いているという。メインの採掘はホース4本で水を流し、大型機械でくみ上げて混ぜ、それを吸い上げ、緑のネットの上に流し続けている。ここは金を採る第一段階だ。こうして金を含んだ水槽から金を取り出す。緑のネットにも金が残っており、ここからもまた洗って金を取り出す。個

人の採掘業者は同様のことをごくごく小規模で行っている。

ここの露天掘りは8年前から始まった。あちこちを試掘して、ここの調査で金鉱脈がありそうだと掘ってみた。鉱脈を見つけるのは鉱山局の仕事である。その後、ありそうなところをマークして、会社や個人が掘っていく。



写真2 露天の中で作業するのはほとんど手作業だ

泥を流している斜めの機械の所にいた60歳の女性は、14歳のころからこの仕事（金採掘）をしているそうで、正規で雇われているのではないが、経験を買われてこの仕事を続けているという。

金の生産高を聞いたが、この現場では分からないという返事だった。

露天掘りの視察を終えて、アマルガムを製造している作業所に向かう。周囲ははげ山である。下に見えるのは川か湖かはっきりしないが水が豊富にある。

この作業所では、別の場所から大型トラックで運ばれる砂に水をかけて流し、金を採る作業と、先ほど視察した露天掘りから金がある程度まとめた状態にした2つのルートでの処理があるとの説明だった。



写真3 掘った砂を工場にトラックで運ぶ

会社では10人が働いている。みな若い。16歳からという。

大型トラックがひっきりなしに砂を運んで来る。運ばれてきた砂は斜面に落とされ、20kmほどある斜面のベルトに水とともに流される。このベルトには凸凹のあるシートが置かれ、そこに重い金がたまる。夜のうちに容器（かご）の中にこの凸凹シートを入れる。凸凹シートで集められた金を、再び凸凹のある機械に（水とともに）流す。仕組みが今ひとつ分からなかったが、金の混じった砂（水）が1カ所に集められる設計になっており、ここで銀、銅、水銀で出来た板の上を流すと、金だけが板にくっつく仕組みである。この板には外枠が作られており、金が混じった水が外には漏れ出ないようにしてある。この板は中国から輸入しており、1枚50万kyat。1年間使用し、その後は燃やして金を採っている。

板の表面に小さい容器に入った水銀（液体）をふりかけ、板の表面をこさぎ取るようにして集めた液体を布で絞ると固体のアマルガムが出来上がる。



写真4 金を取り出す工程

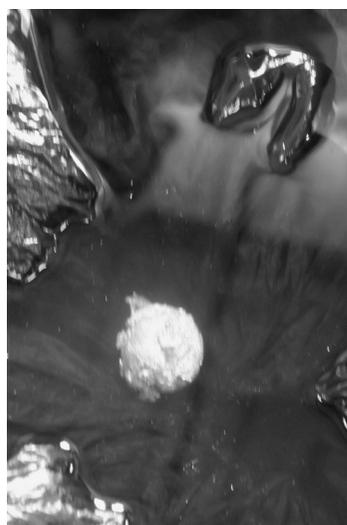


写真5 中央にアマルガムが見える

固体のアマルガムは手数料を払ってマンダレーで合金にしてもらう。ここではその作業はしていない。1カ月の水銀使用量は1.6kg。基本的にはリサイクル。

この会社は鉱業権を100acre持っており、今の作業現場は20acreの広さである。

作業所（写真6）の勤務時間は7時から17時。11時から13時まで2時間の休憩。少年たちが働いていたので事情を聞くと、「今はミャンマーは学校が休みの時期」との返事だった。休みの時に、貧しい家庭では子どもをこうしたところにアルバイトとして出し、働かせるのだという。子どもたちは主にこの周辺の村でリクルートされ、トラックに乗ってやってくる。

基本的には休みがないが、水かけ祭り、満月の祭りなどは1週間休むし、結婚式や葬式にも半日休む。



写真6 休憩する作業員と作業所

ここでは植林用の木を8年前から育てている。金の採掘を始めたころからで、育てているのはチーク材である。企業が主導して苗を育て、植林をしている。大きなハウス（写真7）で苗を育てていた。環境に一定の配慮をしている様子うかがえた。



写真7 植林用の苗を育てているハウス

ここには二枚の看板があった。どういう違いなのか、その関係は不明だった。

THEIDI AUNG SHWE MOE Gold&Mining Co.,Ltd

EVER GOOD LUCK Gold&Mining Co.,Ltd

露天掘りの現場と会社の工場を視察した後、車で次の場所に向かう時、印象的だったのが母子の帰る姿である。スコップを手にした小さい男の子と母親。親子で露天掘りの所に砂金を採りに行ったのだろう。今日はどのくらいの収穫があったのだろうか。手ぶらで帰っているようにも見えた。家に帰ってから親子でどんな話をするのか。露天掘りの大型トラックでの大量採掘との格差があまりに大きかった。ミャンマーの現実の一端でもある。